

北の譜

聞き手 奥津義広記者(北海道新聞社)

⑨<映画音楽>

三百本は超えそう

映画音楽はさて、これまでにどれだけ作ってきたでしょうか。フィルム・ライブラリーに残っているのは二百十本ほどですが、それ以外に小さな記念映画などもやっているので、三百本は超すと思いますね。

第一作は「銀嶺の果て」(昭和二十二年八月)というアクション映画で、監督は谷口千吉さん。主演した三船敏郎さんにとっても最初の作品でした。

こんなことをいっては悪いんですが、それまでは映画音楽というのは極めてちゃちなものだったんですね。それが敗戦で文化国家になったものだから、そろそろオーケストラでいこうという雰囲気もあって、山の映画なら、山で曲を書いていた男がうってつけじゃないか、ということになつたらしいですね。

映画音楽の作曲は、写真(映画)面白ければ面白いですね。純粋音楽と違って、音楽それ自体で勝負するわけではなく、付随物で参加するのですから、絵でいうと純粋絵画とポスターのような差がありますね。

映画音楽では人間の話し声の振動数は開けて、低音と高音ではさんでいくという特別な技法も使います。そうでないとセリフが聞こえなくなりますから。テーマ音楽の書けない写真は、ひとつひとつの場面、場面で勝負ということになります。

社会派作品が多い

ただ、映画の仕事は期間が短すぎますね。四日ぐらいで四十曲も書かないといけないもんですから、これがつらい。「印象に残っている作品は」と聞かれても、いつも日にちが足りず慚愧(ざんき)にたえない感じがあるのでどれといえない。ですから自分の写真はまだ一度も見たことが無いんです。

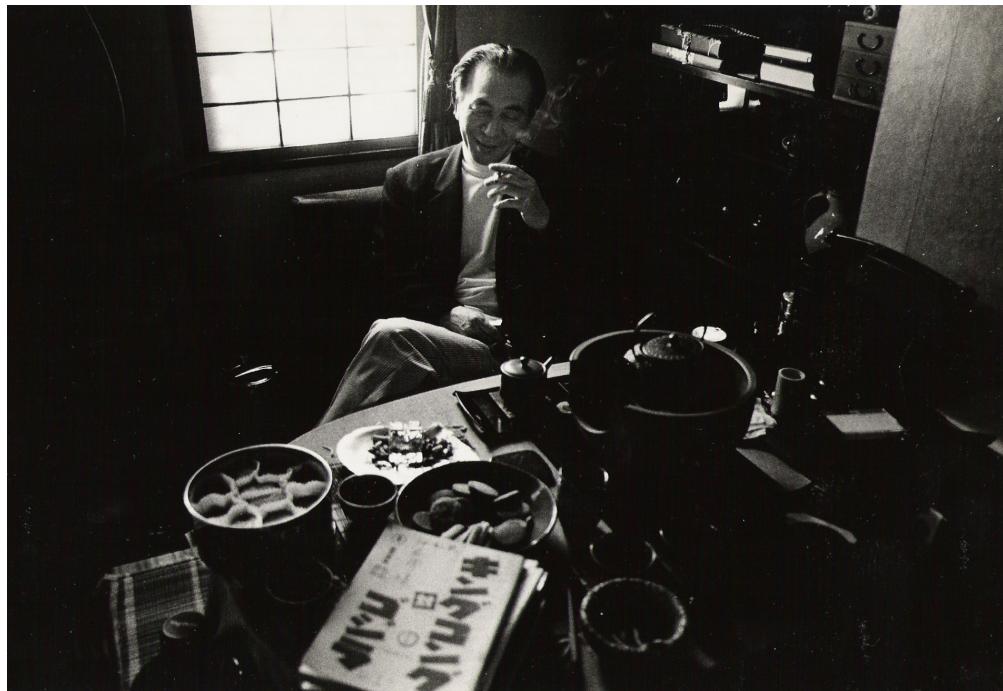
それでもいくつか賞をもらった作品があります。「ビルマの豊饒」(三十一年封切り、監督市川崑)は、同じ年の「真昼の暗黒」(今井正)「鬼火」(千葉泰樹)とともに毎日映画コンクール音楽賞、イタリアのサン・ジョルジオ賞を受けました。

私の写真はなぜか美人の出るようなのは少ないですね。先ほどの「真昼の暗黒」や「原爆の子」(新藤兼人)「帝銀事件ー死刑囚」(熊井啓)といった社会派といわれる作品がかなり多い。そうでなければ「釈迦」(三隅研次)とか、「日本誕生」(稻垣浩)のようなスペクタクルな映画ですね。北海道にゆかりのある作品では「コタンの口笛」(成瀬巳喜男)なんかがあります。

SF 映画も随分作りましたが、最近は「ゴジラ」の音楽が、若い人にも割合人気がありまして。どうしてなのか、僕にもよくわからないのだけども、ゴジラは現代の管理社会が抱える一種の欲

求不満を、傍若無人の破壊行為で解消しているのではないかと思ってます。

二十九年から始まった「ゴジラ」シリーズ十五本(※当時、現在までに 28 本が製作されている)のうち八本(※当時、最終的に「ゴジラ VS デストロイア」までの 12 本を担当)が僕の音楽です。「銀嶺の果て」のプロデューサーだった田中友幸さん(現東宝映画社長※当時→1997 年 4 月逝去)じきじきの依頼でした。



▲1960 年代撮影=自宅にて

手前にキングコング対ゴジラの台本が見える

「ゴジラ」の演奏会も

もともと田舎育ちですから生き物好き、トカゲなんかも好きなんですよ。で、監督の本多猪四郎さんが人に相談したら「そういう奇想天外、荒唐無稽(けい)な話は伊福部が一番」といわれたらしい。

まああまりの忙しさに、二、三本お断りしたこともあったが、監督、カメラの要望を断りきれなかったというところです。もっともこのシリーズとは別に作られた昨年のゴジラの時は、友幸さんの依頼ながら、とうとうご勘弁願いました。戦後、海のものとも山のものとも分からぬ僕を使ってくれた友幸さんですから、たいていの無理は聞くんですが、今度ばかりは体力が続きそうになかった。

その代わりゴジラの演奏会を、東京や札幌で開きましたが、どこも若い人たちでいっぱいだった。私のところにやってくるニューミュージック系のグループもあって、「ゴジラ伝説」といったレコードなんかも出ております。